

あの日から

かがみ

私と娘は、息子が研修医として勤務する街を、久し振りの休日を休しみに訪れた。イヘントで多くの人出でにぎわっていたが、待ち合わせの病院のロビーで、約束の時間を過ぎても息子は来ない。周囲には高校生らしき若者達や十数人、心配そうに集まり泣いている子もいる。どうやら川で生徒が川で溺れ、救急搬送され、現在集中治療を受けているとのこと。私達は諦めてホテルに帰ったけれど、結局

局息子に朝まで帰って来なかった。懸命は治療も容しく、明け方、若い命は消えた。その後日電話で聞かされた。今から二十七年も昔のあの日の出来事が、私の脳裏に鮮烈な記憶として、今でも残っている。医師として、麻酔科医を志し、集中治療を学ぶはじめた初期、いかに命の最前線に立たされているのかということを私自身か思い知らされた。あの日。あんなに、とれくらの日々、様々な命と向き合い、生と死を見つめ闘って来たこ

とだろう。日々、進歩してゆく医療とはいえ  
人々の命に寄り添い、見つめ合ってきた姿と  
年月と時間には、胸話まる想いがある。私も  
ここまでの人生、全身麻酔で大手術を何度も  
受けてきた。術前から術後までの詳しい説明  
や、目が覚めた時の安心感等、麻酔科医への  
絶対的な信頼感がなければ、手術には踏み切  
れなかっただろう。厳しい現実と、現場を知  
り歩いてきたからこそ、麻酔科医には優れて  
と、正しい誠実さを持ち合わせている。病と  
抱えた多くの患者は、どうしても自己中心的  
に考え方に陥りやすいが、日々の緊張感の中  
で研み澄まされた神経は人を育てる力がある  
のだと思う。ペインクリニックで働くお薬  
の処方箋をもらう為、三十分以上に日常会話  
と生き生きと楽しそうに話し込んでゆく患者  
達、困った顔もしい下、笑顔で対応する医  
師達。人は究極の厳しい現実や辛さや困難に  
立ち向かい、た時、本当の優しさや表わしてい  
るのにも知れない。医師の笑顔や優しさや欲

しくてペインクリニックを多くの患者が訪ねると私は思う。最近、コロナ禍で医療従事者の大変さがマスコミで取り上げられるようになった。そして久しいが、麻酔科医は大昔から縁の下のカマキリとして働いてきた。病院は眠らない。休まない。静まり返った暗闇の病棟の中で灯りのついた手術室や集中治療室、時間制限の無い救急車の対応等、お正月やゴールデンウィークも無く、昼夜を問わず、そこに懸命に病と闘う患者さんと、共に命に寄り添う麻酔科医がいる。多くの日本中の麻酔科医、頑張れ！、そしてありがとう。

「格の病闘です」今日台風です。初雪が降りていますね。等々、外部と遮断された手術室からは見える事の出来ない季節の風の色を、長い年月メールで送ってきた。深夜一時眠りにつく前、当直の息子を想いつおやすみ下さいと手を合わせる私。